

「想定外」を超えて — 社会教育が目指す理想の「学び」 —

筑波大学大学院人間総合科学研究科 助教 上 田 孝 典

こうして第2号の「地域と教育」研究会報が完成したことを嬉しく思う。去る3月11日に発生した東日本大震災の影響もあり、予定より大幅に遅れての刊行になってしまったが、生涯学習・社会教育学研究室の大学院生を中心に、執筆・編集に携わってくれた「地域と教育」研究会メンバーに感謝したい。

今回の大災害は、現代に生きる私たちの暮らしが「危険」(U.Beck)と隣り合わせになっていることを実感させた。こうした「危険」を回避する手だけではなく、解決不能の事態に対して、責任の所在を追求しても「想定外」であったというエクスキューズが繰り返されるだけである。科学技術の進歩は人智の及ばない「危険」を生み出し、一人歩きしていく。私たちは、計量可能なリスクを社会的に分散し、また政策的に回避していく福祉国家のパラダイムを越えて、「想定外」の「危険」と向き合わざるを得ない新たな時代への転換点に生きている。

今日の私たちの暮らしは近代科学の発展によって成し遂げられたものである。生活の合理化と経済的豊かさを享受する私たちは、もはや後戻りをすることはできない。しかしながら同時に、科学万能主義に基づく人為の限界も直視しなければならない。かつて近代科学と無縁であった暮らしにおいて、人間は自然と共に生き、自然の恩恵を受けながら暮らしてきた。いつから自然を人間の支配下に置き、人為的に操作できるものと錯覚してしまったのだろうか。人間にとって自然の力は本来的に「想定外」であり、このことを前提に私たちの暮らしが成り立ってきたはずである。真理を探索せんとする絶えざる欲望と科学の暴走を抑制することができるのは、人間の理性であり自然に対する敬意と畏怖の念である。

社会教育の学びとは、地域の住民が日々懸命に暮らすなかで、一人ひとりが「よりよい」生活を目指して行動するためのガソリンといえる。私たちは絶えずガソリンを補給しながら、「よりよい」生活とは何かを問い続けて暮らしている。自然の猛威も、科学技術が生み出す人為的現象も、人間社会に生じる諸問題も、「想定外」となりうることを「想定」する想像力と判断力が必要であり、学びを通じて「よりよい」生活が意味する快適さや効率さや豊かさの質を考察することで、「想定外」の事態を「想定」していく力を獲得していかなければならない。

現在も厳しい困難に直面している多くの被災者は、生活の拠点を奪われ、故郷を追われ、避難所で不安な暮らしを強いられている。そこであらためて注目されているのは、地域共同体における人々の連帯意識と土地への愛着である。集落を基礎とする自治会・町内会が一丸となって、いつか必ず、みんなそろって帰ってくると、故郷の再生を熱望している。社会教育研究を志す「地域と教育」研究会では、地域に根ざしながら自然の中で共に生きる人間の暮らしを見つめ、持続可能な人間の営みの物語を創造していく教育を探究するために、小さな一步を積み重ねていきたいと願っている。

最後に、研究会の活動にあたってお世話になった太子町教育委員会、さはら小学校、つくば・市民ネットワークほか、関係各位に感謝申し上げますとともに、今後とも研究会の活動に御理解と御協力を賜りたい。